

軍記物語の擬声語

—— 矢音の表記を中心として ——

梶 原 正 昭

「与一鎗をとつてつがひ、よつびいてひやうどはなつ。小兵といふぢやう十二束三ぶせ、弓はつよし、浦ひよく程ながなりして、あやまたず扇のかなめぎは一寸ばかりをいて、ひいふつとぞめきつたる」

『平家物語』の巻十一「那須与一」の、名高い結末の一節である。判官義経から扇の的を射ることを命じられた与一は、馬を海中に乗り入れるに向うが、矢比が遠いうえ、北風がはげしく吹いて扇の動揺がひどく、とても射られる状態ではない。せっぱつまった与一は、そこで思わず郷里の神々に祈りをこめ、目を見開くと、心なしか風が少し吹き弱って、扇も射よげに見えた。好機逸すべからずとすばやく弓をとりあげた与一は、鎗矢をつがえて、間髪をいれず切つて放つ。沖には平家、陸には源氏、全軍が息をつめて見まもる緊張の一瞬、しんと静まりかえった戦場をひき裂く「ひやう」という鋭い弦音、浦々一帯に響き渡るような「ぶーん」という唸りを長く曳いて、「ひいふつ」と矢音高く鎗矢はみごと

いかにも盲目の琵琶法師が語る「語りもの」らしく、きわめて聴覚的な描写だが、「ひやう」「ひいふつ」という擬声語が実にうまく使われ、大きな効果をあげている。「ひやう」は、矢が弦を離れて飛ぶ音、「ひいふつ」は、その矢が扇を射ぬく音をあらわしたもののだが、この擬声語があるためにその情景が具体的なものとなり、臨場感が増幅されていることに留意すべきであろう。また、急テンポに語られるこの一節は、これらの擬声語によって一種のリズムを与えられ、畳みかけるような強烈で感動的な幕切れの効果をつくり出しているといつてよい。

ところで、ここに引いたのは、一方流の語り本のひとつである覚一本の本文であるが、他の諸本では、この一節はどのようにに表現されているであろうか。たとえば、鎌倉期の増補本の一つである四部合戦状本では、

「目見開扇射吉気時打咬根囀鎗十一束三伏引懸鎗上且持放長鳴扇鹿日本破他射破海難射入」

となっており、延慶本では、

「余一鎗取てはけて十二束二伏をよ引てしはしかためて兵と射たり、浦ひゞけと海の面を遠鳴して五六段を射渡し扇の蚊目^{はた}といて二にさとそさけにける。」

となつていて、かなりに違ふ。傍線部が擬声語の部分だが、四部合戦本には「ひやう」という弦音がなく、また両書とも矢音が「ひいふつ」ではなく、「はた」となっている。

以上のように、諸本によって揺れがあるので、当面の課題である擬声語の表記に焦点を絞って、主要な伝本十本を比較してみると、つぎのような結果になった。

諸本	(I)		(II)	
	覚一本	城方本	屋代本	鎌倉本
四部合戦本	且シ持シ放ハ	且シ持シ放ハ	破他射破	はたといて二にさとそさけにける
延慶本	しはしかためて兵と射たり	しはしかためて兵と射たり	はたといて二にさとそさけにける	はたといて二にさとそさけにける
平松家本	暫シ持テ放ツ	暫シ持テ放ツ	ヒフツト射切タレハ	ヒフツト射切タレハ
南都本	ヨツ引テヒヤウト射	ヨツ引テヒヤウト射	ヒフツト射切タレハ	ヒフツト射切タレハ
長門本	しはしかためて放ちければ	しはしかためて放ちければ	ひいはたと射たり	ひいはたと射たり
源平盛衰記	兵ト放	ふつと射切たりければ	ふつと射切たりければ	ふつと射切たりければ

まず留意されるのは、(I)の弦音については、「よつびいてひやうど放つ」とする覚一本・城方本・南都本と、「暫したもつて(かためて)放つ」とする屋代本・鎌倉本・四部合戦本・平松家本・長門本との、二つの系統に分けられることである。「兵ト放」とする『源平盛衰記』は前者に近く、「しはしかためて兵と射たり」とする延慶本はいわば折衷型といつてよい。(II)の矢音の方も、「ひいふつ」と射切ったとする覚一本・城方本・屋代本・鎌倉本・平松家本・南都本と、「はた」と射たとする四部合戦本・延慶本・長門本との二つの系統に分けることができる。ここでも『源平盛衰記』は、前者の変形というかたちをとっている。多少の出入りはあるが、四部合戦本・延慶本・長門本などの読みもの系諸本が、(I)(II)ともに表記を異にし別系統、(II)のみを異にする屋代本・鎌倉本・平松家本が中間的なたちということになり、どうやら語りものの系諸本の段階で本文のような表現が定着したらしいことがわかる。読みものの系の諸本が、(I)の弦音に擬声語を使用していないことも、その点で注意をひく。

もう一例あげてみよう。

「やにはに八人きりふせ、九人にあたるかたきが甲の鉢にあまりにつよう打あてて、めぬきのもとよりちやうどをれ、くつとぬけて、河へさんぶと入にけり。」

同じく『平家物語』の巻四「橋合戦」に描かれた、三井寺の荒法師簡井の淨妙房明秀の奮戦ぶりを示す一節だが、「ちやう」・「くつ」・「さんぶ」という三つの擬声語が、ここでも明秀のすさまじい闘志とめまぐるしい動きを浮彫りにし、スピード感あふれた緊

迫味を盛りあげるのに、きわめて大きな役割を果たしている。この一節も諸本によって異同が見られるので、前の場合と同様、擬声語の表記に関してこれを比較してみると、つぎのようになる。

諸本	(I)	(II)	(III)
寛一本	めぬきのもとより りちやうどをれ	くつとぬけて	河へさんぶと入 にけり
城方本	目ぬきのもとより りちやうどをれ	ぐつとぬけて	川へさんぶとぞ 入にける
百二十句本	目貫のもとより ちやうど折れ		川へざぶと入る
鎌倉本	目抜ノ本ヨリ 丁ト折	堀ト抜テ	川へ残浮ト入ニ ケリ
平松家本	目抜ノ本ヨリ 丁ト打折	堀ト抜テ	河へ残浮ト入ニ シカ
延慶本	打と打折		河に捨つ
長門本	目貫のもとより 打折りて		太刀は河へさつ と入
源平盛衰記	目貫穴のもとより 折にけり		真逆に川中へぞ 落にける

寛一本とはば同文なのは、城方本・鎌倉本・平松家本で、(II)の「くつとぬけて」の部分を欠いているのが、百二十句本、ここでも、読みもの系の延慶本・長門本・『源平盛衰記』などの諸本が、表記を異にしていることが注目される。ことに延慶本のごとき

は、

「好む薙刀にて十九騎切臥て廿騎に当る度甲にからりと打当て折にければ河へ投捨るまゝに太刀を抜て九騎切臥て十騎に当る度打と打折河に捨つ」

と、長刀と太刀の戦いを同じように並列的に簡略に扱っており、太刀打ちの奮戦ぶりを擬声語をちりばめて活写する、語りもの系の諸本の描きかたとは、ずいぶん趣きがちがったものになっている。読みもの系の諸本は、全般的に擬声語が乏しく、わずかに見られる(III)の水音も、「河へさつと入」・「河へからと投入て」とその表記に揺れがあり、「ちやう」・「くつ」・「さんぶ」の三つの擬声語の組み合わせによる、リズムカルな表現の技巧が確立するのは、やはり語りもの系の諸本においてであったことがわかる。

※

以上見て来たように、『平家物語』の諸本の中では、語りもの系の伝本がもっとも擬声語を多用し、また有効に定着化させていることが知られるが、それでは『平家物語』全体では、どのような擬声語が、どのような頻度で使用されているのであろうか。その点を明らかにするため、『平家物語』(寛一本)の各章段ごとの擬声語の使用状況を調査してみよう。

1	卷	章	段	名	擬	声	語	数	章	段	名	擬	声	語	数
祇	王	ほとほと							1	殿下乗合	どつと				1

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
遠那須矢	勝浦・大坂越	生ずきの沙汰	室山	火打合戦	飛脚到来	奈良炎上	信連	無文	小教訓
ひやうと・ひやうふつと	どつと・ざつと	どつと	どつと	ざつと	どつと・ざつと	どつと・はつとはたと・ちやうと	はたと・ちやうと	はとほとと	ちやうと
2 2 2	1	2 1 2 1 2 1 1	1	1 1	2 1	1 4	1 2	1	1
先帝身投	嗣信最期	宇治川先陣		俱利伽羅落	築島	文覚荒行	橋合戦	行隆之沙汰	
からからと	ひやうと・どうと・ひやうと・からりと	ふつふつと・ざつと・さつと・どつと		どつと	どつと・ばつと	ざつと	からと・さらさらと・ちやうと・くつと・さんぶと・づんと	どつと	
1 4 4		2 1 3 1 2 4		1	2	2	2 6	1	

12	能登殿最期	ひやうと・どうと	2
泊瀬六代	ちやうと・どうと・はたと		
	3	六代被斬	
		ばつと	
			1

『平家物語』全体で、擬声語は一九種・八六例を数えることができるが、ちなみにこれを巻別・章段別に見てみると、つぎのようになる。(カッコ内は使用度数)

〈巻別〉

巻九(23) 巻十一(17) 巻四(11) 巻五・六(5)
 巻十二(4) 巻七(3) 巻一・三(2) 巻二・八・十
 (1) 灌頂巻(0)

〈章段別〉

橋合戦(6) 物怪之沙汰・宇治川先陣・嗣信最期・弓流
 (4) 二度之懸・泊瀬六代(3) 信連・鵜・築島・横田河
 原合戦・木曾最期・樋口被討罰・坂落・敦盛最期・知章最
 期・勝浦大坂越・那須与一・遠矢・能登殿最期(2) 祇王・
 殿下乗合・小教訓・無文・行隆之沙汰・宮御最期・文覚荒
 行・奈良炎上・飛脚到来・火打合戦・俱利伽羅落・経政都
 落・室山・生ずきの沙汰・河原合戦・三草合戦・一二之懸・
 越中前司最期・忠度最期・藤戸・先帝身投・六代被斬(1)
 予想されたことではあるが、巻別では、木曾合戦と一の谷合戦を
 内容とする巻九、屋島合戦と壇の浦合戦を扱った巻十一、源三位
 頼政の挙兵を描いた巻四と、合戦を扱った巻々にその例が多く、
 章段別でも、「橋合戦」・「宇治川先陣」・「嗣信最期」など、ほと

んど合戦記的章段に集中していることが注意をひく。
 もっとも多く使われているのは、「どつと」・「ざつと」などだ
 が、使用度数の多い順にこれを整理してみると、ほぼつぎのよう
 になる。

〈語句別〉

どつと(15) ざつと(14) どうと(8) ひやうと(6)
 ひやうふつと・ばつと・ちやうと(4) はたと(3) ひ
 たひたと・ひいふつと・ほとほとと(2) ふつと・がら
 と・からりと・ひやうづばと・さんぶと・づんと・からりか
 らりと・からからと(1)

内容の上から見ると、「どつと」(関の声)、「ひやうと・ひやうふ
 つと・ひいふつと・ひやうづばと・ふつと」(矢音)、「はたと・
 ちやうと・づんと」(太刀音)のような、合戦での音響を示すも
 のが多いことがめだつたが、とくに矢音が多様に使い分けられてい
 ることに留意すべきであろう。

※

そこで、つぎに矢音について少し考察を加えて置くことにしよ
 う。
 まず「ひやう」というのは、先にも触れたように、矢が弦を放

れて勢いよく飛ぶ音を表わしたもので、古くは「ひやうど」と濁音で読むのが通例であつたらしく、『日葡辞書』にも

「Fido Fedo (ヒヤウドまたはヘヤウド) 副詞。矢が発射される際にびゅうと鳴るさま。」

とある。本来、「ひやう」という表現は、突然に物が動いたり動作を起こしたりする場合に用いられるものであつたようで、たとえば『蜻蛉日記』には、「こゝにある人、ひやうとよりきていふ」などという用例が見られる。弦音の場合は、「よつ引いてひやうど放つ」・「暫し固めてひやうど射る」というように、前に「よつ引いて」とか「暫し固めて」とかの語がつくことが多い。ことに「よつ引いて」が前につく例はおびただしく、一種の成句のようなかたちで用いられているが、十分に弦を引きしほって、いわゆる「満を持す」という状態で狙いをしつかり定めてから、突然切つて放つというような時にこの語が使われるわけで、「差し詰め引き詰め散々に射る」というような、「矢継早や」の射法には、この語はほとんど用いられることはない。

つぎに、「ひやうふつ」と「ひいふつ」だが、『日葡辞書』では、「ひやうふつ」とについて、つぎのように説明している。

「Fiofuto (ヒヤウフット) 副詞。いつも、普通に。また、矢が目標にあたる時に立てる音の形容。」

『日本国語大辞典』を試みに引いてみると、つぎのようにある。

「ひようふつと」

矢が音をたてて飛んで、命中する音を表わす語。

「ひいふつと」

矢を射放つ響き、矢が風を切つて飛び、勢いよく命中する音を表わす語。

両語とも、矢が勢いよく飛んで目標に命中する時の音を表わしたものとしいわけだが、用例を仔細に点検してみると、「ひやうふつ」と「ひいふつ」とでは、そのニュアンスに多少の差があるように思われる。

たとえば、「ひやうふつと」は、矢が弦を放れる時の「ひやう」という弦音と、「ふつ」という矢音とが組み合わされたものだが、(1)「おつかゝつてよつびいてひやうふつとゐる。いた手なれば、まつかうを馬のかしらにあててうつぶし給へる処に」(木曾最期)

(2)「是をみてよつびいてひやうふつとゐる。河原太郎が鎧のむないたうしろへつつとゐぬかれて」(二度之懸)

(3)「まつさきにすゝんだる旗さしがしや頸のほねをひやうふつとゐて、馬よりさかさまにゐおとす」(知章最期)

(4)「今度はなかさしとつてうちくはせ、よつびいてしや頸の骨をひやうふつとゐて、ふなぞこへさかさまにあたをす」(弓流)

(5)「わが大手にをしにぎつて、十五束ありけるをうちくはせ、よつびいてひやうどはなつ。四町余をつつとゐわたして、大船のへにたつたる仁井の紀四郎親清がまつたゝなかをひやうふつとゐて、ふなぞこへさかさまにあたうす」(遠矢)

というように、用例ではむしろ矢を射る行為に引き寄せて表現されており、「うしろへつつとゐぬかれ」とか、「さかさまにゐおと

す」といった、その結果とはいちおう区別してとらえられていることが注意される。

これに対して、「ひいふつと」の場合は、矢が風を切って飛ぶ「ひい」という音と、それが目標に命中する時の「ふつ」という音との組み合わせで、

(1)「二の矢に小鎗とつてつがひ、ひいふつとゐきつて、鵜とかぶらとならべて前にぞおとしたる。」(鵜)

(2)「浦ひよく程なになりして、あやまたず扇のかなめぎは一寸ばかりをいて、ひいふつとぞゐきつたる。」(那須与一)

というように、あきらかに矢の的中の状況を示すものとして描き出されている。この兩例とも、「ひいふつとゐきる」と矢が目標物を切断したような描きかたになっているが、「ふつ」という矢音は、比較的堅いものを射ちぎる場合に多く用いられたようである。

これと対照的なのが、「ひやうづばと」で、こちらは、

「楯のかげよりぬりのにくろぼろはいだる大の矢をもつて、まつさきにすゝんだるみをのやの十郎が馬の左のむながいづくしを、ひやうづばとゐて、はずのかくるゝ程ぞゐこうだる。」(弓流)

というように、馬の体のようなやわらかいものに深く突き刺さる場合を表わす語として使われている。

※

このように、矢の射かたや当りかたで、擬声語の表現がかなり

こまかく描き分けられていることがわかるが、『平家物語』以外の軍記諸作品に眼を通すと、このほかに実にさまざまな矢音の表記がなされている。眼につくままにあげてみると、

(1)「はたと」

「鞍のまへわをはたと射わつて、草摺のたゝなわりめを後へつと射ぬき」(『保元物語』)

「二の矢つがひてひやうど射ければ、射むけのそでにはたと当てちつともたゝず。」(『平治物語』)

「平九郎判官持たりける弓の鳥打所をはたと射切つて、弓手の方に竝んで扣たる播磨国住人原田右馬允が頸の骨に中りて落ぬ。」(『承久記』)

(2)「づはと」

「矢はあなたへつと通て大地にづはとたつ。」(『保元物語』)

(3)「ちやうと」

「追様にひやうど射ければ、重盛の鎧のをしつけにちやうどあたりてとびかへる。」(『平治物語』)

「馬に於ては申受んとて、能引て丁と射る。」(『承久記』)

(4)「づと」

「末強に遠鳴して、楯突きたる悪僧の弓手の小腕を、楯の板を添へてづと射切り、雁股は手楯に立つ。」(『義経記』)

(5)「がばと」

「矢の下にがばとぞ射倒したる」(『義経記』)

(6)「はらりと」

「ひやうどとをなりして、右の折骨二つ三つ、はらりとけ

れば、鎧はわれて、さつとちりければ、鏃は、岩にがしとあたる。」(『曾我物語』)

というぐあい、きわめてバラエティに富んでいる。このほか狂言の『釣狐』には、「二の矢は上総介、ひやうどつきと射る」と、「ひやうどつき」といった奇抜な形容も見られるが、軍記作品における矢音の表現は概して即物的で、現実味にあふれているといつてよい。

この源平時代は、弓矢のいくさの最盛期で、射技は武士のもっとも嗜むべきものとされ、矢音についての知識も、実戦における必須のものとして重んじられたに違いない。そしてその矢音への深い関心が、具体的に豊富な擬声語表現をつくり出すことになったものと思われる。やや時代は降るが、室町時代の武芸故実書のひとつである中原豊後守高忠の『就三弓馬儀一大概聞書』(高忠聞書)には、矢音の種類とその聞き分けかたが、つぎのようにくわしく提示されている。

一、一手じんどうにて、しきのはさみものを射ては、ひやうはたと射てと云也。はづしたるときは、ひやうすつとはづしてと云なり。

一、四目にてしきのはさみ物を射ては、ひひはたと射てと云也。はづれたる時は、ひすつとはづしてと云也。

一、じんどうにて草鹿・丸物・鳥・菟・狸・木草の葉・はながみふぜいの物をいては、ひやううすつとはづしてと云也。

一、かぶらにて物をいては、ひふつといてといふ也。やぶさめの的に射あてたる時は、ひはたと云なり。はづしたる時は、

ひすつとはづしてといふなり。

一、四目にて草鹿・丸物・鳥・菟・狸ふぜいの物をいては、ひしひしと射てと云なり。はづしたる時は、是もひすつとはづしてといふなり。

一、かりまたにて物をいては、ひやうふつといてといふなり。はづしては、ひやうすつとはづしてと云也。

一、そや・けんじりにて物を射ては、ひやうつばと射てと云なり。はづしたる時は、ひやうすつとはづしてと云。何もく物々によりて、言葉かはるべき也。

一、ひやうしといてと云。是は円物の矢音なり。

一、じんどうの矢音、ひはたといてと云。是は御意をうけたるにて候。わろく覚候哉。へいしといふ。是は物にかきてをきて候。

一、矢音の事、引目の犬にあたりたるは、ときといふ。はづれたる矢音、はいすんと云。

一、小笠懸の矢音、ひはたといてと云。

一、やぶさめの矢音、はたひつといてと云。

一、かりまたの矢音、ひやうふつといきつてと云。

一手じんどう・四目・かぶら矢・征矢・剣尻など、矢の種類によつて、また「四季の挟み物」・「草鹿」・「丸物」・「鳥獸」・「草木」・「鼻紙」・「小笠懸」・「流鏑馬」など、目標物の形状によつて、さらに的中した場合と外れた場合など、まことに詳細綿密に矢音の差違が解説されていることに驚かされる。

※

このほかにも、武芸伝書や故実書の類で、矢音に言及しているものは少なくない。そこで参考までに、その主要なものをつぎに列挙しておく。

《筈掛記》

引目はづれて海河へ入矢音はたんへいと語べし。あたる矢音はへしとしつとと射つてと云。

《大双紙》（小笠原家記）

とがり矢などにて物を射通したる矢音の事、ひやうつばと云也。雑談などにも、左様にかたるべし。射はづしたる矢をば、ひやうすつかと射はづしたりと可談也。四目・引目にて物を射切たる矢音の事、ひいふつと射たると談るべし。射当たる音の事、ひいはたと云也。射はづしたる音の事、ひいすつと射はづしたると談るべき也。海河へ射こみたる矢をば、遠なりしてさぶと入たると談るなり。

《諸書当用抄》

はさみ物は、ひやうはたと射てといふ。やぶさめはひいはたと射てといふ。丸物をばしど射てといふべし。かやうの事しらぬは武士の恥なりと沙汰有也。

《大友興廃記・鑑連矢音指南条》

夫矢音の事は、そや・けんさきにてものを射て中たるとき、ひやうつとはと射てといふ。いぬきてともいふ。はづれたるときは、ひやうするとはづしてといふなり。かりまたにてもの

を射て中をば、ひやうふつといふ。いきりてとも云。はづれをば、ひやうするといふ。かぶら矢にてものを射て中るとき、ひやうふつと云。はづれたるときは、ひすつといはずしてと云。じんどうにて中るときは、ひやうしといふ。はづしては、ひやうすといふ。矢頃にてはさみものを射ては、ひやうはたと射てと云。はづれては、ひすつと云。四目にて物をいてあたるを、ひしといてといふ。はづれをば、ひすつとはづしてといふ。ひき目にて物を射てやしをば、とき射てと云。筈かけの矢音、へしと射てといふ。小的の矢音は、ふしといてといふ。みつもの同前。大まとの矢をとば、はたと射てといふなり。かやうのことも、侍の知るべきことなり。よく／＼おぼえよとのしなんなり。

《貞丈雑記》

矢音と云は、矢の物にあたりたる音也。神頭の矢音は、ひやうしとあたりたると云也。四目の矢音は、ひやうひしとあたると云也。雁股の矢音は、ひやうふつと射切ると云也。征矢・錨尻の矢音は、ひやうづばとあたると云也。鎗矢の矢音は、ひいふつとあたると云也。小藁目・笠懸藁目は、へいしとあたると云也。的出張記に見えたり。又大射藁目の矢音は、ときとあたると云也。犬追物の書に見えたり。ひやうといひ、へいといひ、ひいといひ、皆矢のとぶ時なりひやく音也。しとといひ、ひしといひ、ふつといひ、づばといひ、ふつと云は、皆物にあたる音也。

『筈掛記』は、筈掛の故実を記した伝書で、永正九年（一五二二）

の成立と伝えられるもの。『大双紙』は、小笠原宗長（貞慶）の筆になる小笠原流の武家故実書。『諸書当用抄』は、別称を『北畠家記』といい、北畠家に伝わる故実書に伊勢貞丈が注を加えたもの。『大友興廃記』は、豊後の佐伯氏に仕える杉谷宗重が著わした大友氏の興亡史。そして最後の『貞丈雑記』は、武家故実に関する伊勢貞丈の考証として名高いものである。

文中に、「かやうの事しらぬは武士の恥なりと沙汰有也」（『諸

書当用抄』とか、「かやうのことも、侍の知べきことなり。よく／＼おぼえよとのしなんなり。」（『大友興廃記』）などと記されているように、これらの矢音の知識は、弓箭に携わる者の間では常識とされていたものと思われるが、相互に重複する部分も多く、また叙述がかなり錯綜してもいるので、これを整理してつぎに表記しておく。

ひやう					矢 音	矢の種類	的の狀態	射 法	出 典
は た	そや・けんじり とがり矢 そや・けんさき 征矢・劔尻	物 物 物 もの	円物	射あてた時 射通した時 射あてた時 "	高 忠 聞 書 大 双 紙 大 友 興 廃 記 貞 丈 雑 記				
し と	じんどう 神頭			射あてた時 " "	高 忠 聞 書 大 友 興 廃 記 貞 丈 雑 記				
ひ し	四目			射あてた時	貞 丈 雑 記				
ふ つ	かりまた かりまた	物 物		射切つた時 射あてた時	高 忠 聞 書 大 友 興 廃 記				

ひ い						
す つ	ふ つ	は た	す る	す つ か	す つ	雁 股
四目 四目 かぶら矢 四目・引目 かぶら矢	四目 四目・引目 鏑矢	四目 じんとう かぶら矢 四目・引目	そや・けんさき かりまた		じんとう かりまた そや・けんじり じんとう	
しきのほさみ物 草鹿・丸物・鳥・菟 狸ふぜいの物 やぶさめ 物の もの	物 物	小笠懸 しきのほさみ物 やぶさめ 物 やぶさめ	物 物		草鹿・丸物・鳥・菟 狸・本草の葉・はな紙	
射外した時 射あてた時 射切つた時 射あてた時	射あてた時 射切つた時 射あてた時	射あてた時 射あてた時 射切つた時 射あてた時	射外した時 射外した時	射外した時 射外した時	射外した時 射外した時 射切つた時 射あてた時	
高忠聞書 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記	高忠聞書 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記	高忠聞書 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記	高忠聞書 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記	高忠聞書 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記	高忠聞書 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記 大友興廃記	貞丈雑記

へい	たん	ひし	ほい	たい	はた					
し	へい	ひし	すん	ひつ	ひつ	とき	ふし	つと	しとど	はた
引目 小養目・笠懸養目	引目	四目	引目			大射養目 引目		引目		
笠掛 "		草鹿・丸物・鳥・菟 狸ふぜいの物	犬	やぶさめ	やぶさめ	犬 犬	小的 みつの	笠懸	丸物	大的
射あてた時 "	外れて海へ入った時	射あてた時	射外した時	射あてた時	射あてた時	射あてた時 "	射あてた時 "	射あてた時	射あてた時	射あてた時
笠掛 記 大友興廃記 貞丈 雑記	笠掛 記 大友興廃記	高忠 聞書	高忠 聞書	高忠 聞書	高忠 聞書	貞丈 雑記 高忠 聞書	大友興廃記 "	笠掛 記	諸書 当用抄	大友興廃記

さぶ	海河	射込んだ時	大 双 紙
ひし	四目	物	射あてた時
			大友興廃記

念のため、これを矢とその射法との関係でまとめてみると、ほゞつぎのようになるう。

(1) 征矢・劔尻・尖矢などで、

(イ)物を射通した時……「ひやうづば」

(ロ)物を射外した時……「ひやうすつ」・「ひやうすつか」・「ひやうする」

(2) 神頭で、

(イ)挟み物を射あてた時……「ひやうはた」・「ひいはた」

(ロ)円物を射あてた時……「ひやうしと」

(ハ)草鹿・円物などを射外した時……「ひやうすつ」

(ニ)挟み物を射外した時……「ひいすつ」

(3) 四目で、

(イ)挟み物を射あてた時……「ひいはた」

(ロ)やぶさめを射あてた時……「ひいふつ」

(ハ)物を射切った時……「ひいふつ」

(ニ)草鹿・円物・鳥獸などを射あてた時……「ひしひし」・「ひいし」

(ホ)物を射切った時……「ひいふつ」

(ハ)挟み物・草鹿・円物などを射外した時……「ひいすつ」

(4) 引目で、

(イ)物を射あてた時……「ひいはた」

(ロ)やぶさめを射あてた時……「ひいはた」

(ハ)笠掛を射あてた時……「へいし」・「つと」

(ニ)物を射切った時……「ひいふつ」

(ホ)犬を射あてた時……「とき」

(ハ)物を射外した時……「ひいすつ」

(ロ)犬を射外した時……「はいすん」

(ハ)射外して海へ入った時……「たんへい」

(5) 雁股で、

(イ)物を射切った時……「ひやうふつ」

(ロ)物を射外した時……「ひやうする」

(ハ)草鹿・円物・鳥獸などを射外した時……「ひやうすつ」

(6) 鎗矢で、

(イ)物を射あてた時……「ひいふつ」

(ロ)やぶさめを射あてた時……「ひいはた」

(ハ)物を射外した時……「ひいすつ」

(ニ)やぶさめを射外した時……「ひいすつ」

これらの矢音の表記は、実際の射技の体験に裏づけられたものと思われるが、犬追物で犬を射外した時の「はいすん」という表現とか、射外して海へ入った時の「たんへい」という表現など、た

いへんユニークでおもしろい。

※

以上のように、矢音に関する擬声語は、射技の発展とともに多様化し、また豊富になって行ったようであるが、これらの矢音の表記が文芸作品の上に登場するようになるのは、いつごろからであろうか。その初出をまだ明らかにすることができないが、最後にその点について一言触れておきたい。

此の盗人は、その盗みたる馬に乗りて、今は逃げ得ぬと思ひければ、関山のわきに水にてある所、いたくも走らずして、水をつぶ／＼と歩ばして行きけるに、頼信これを聞きて、事も其処々に本より契りたらむやうに、暗ければ頼義が有^あ無^なも知られぬに、頼信、「射よ、あれや」と云ひける言も未だ果てぬに、弓音なり。尻答へぬと聞くに合はせて、馬の走りて行く鎧の人も乗らぬ音にてから／＼と聞えければ、亦頼信がいはい、「盗人は既に射落してけり。速かに末に走らせ会ひて、馬を取りて来よ」とばかり云ひかけて、取りて来らむをも待たず、それより返りければ、頼義は末に走らせ会ひて、馬を取りて返りけるに、郎等どもは此の事を聞き付けて、一二人づゝぞ道に來たり会ひにける。

『今昔物語』巻二十五の「源頼信朝臣の男頼義、馬盗人を射殺せる語」の一節、暗夜の中で馬盗人を逢坂関に追いつめた源頼信が、子息の頼義にこれを射留めさせるといふ場面だが、「弓音すなり。尻答へぬと聞くに合はせて」云々と、弦音や矢音に言及し

ながら、ここではまだそれを擬声語で表現するというかたちをとっていないことが注目される。軍記ならば、さしずめ、

頼信、「射よ、あれや」と云ひける言も未だ果てぬに、よつ引いてひやうど放つ。矢音はたと聞くに合はせて、馬の走りて行く鎧の人も乗らぬ音にてから／＼と聞えければ、

とあるところであろうが、そうした矢音がまだこの段階では定着していなかったのであろう。「つぶ／＼と」とか、「から／＼と」といった擬声語表記がなされていながら、矢音にまったく触れていないことは、そのことを裏づけるものといつてよい。

ところが、同じ説話集でも、『宇治拾遺物語』になると、つぎのように矢音の表記がはっきりとあらわれて来る。

眞師思ふやう、聖は年比経をもたもち読み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ、この童、我が身などは、経の向きたる方も知らぬに、見え給へるは、心は得られぬ事なりと、心のうちに思ひて、この事試みてん。これ罪得べき事にあらざと思ひて、尖矢を弓につがひて、聖の拌み入りたる上よりさし越して、弓を強く引きて、ひやうと射たりければ、御胸の程に当るやうにて、火を打ち消つごとくにて、光も失せぬ。

(巻八・眞師仏を射る事)

つまり『今昔物語』から『宇治拾遺物語』への過程に当る時期に、矢音の表記が確立したと推測されるわけだが、もう一例あげてみよう。

黒馬乗タル武者年^(卅)許ナル手繩ヲ不捨被テ相付 左手ニ改所弓手返

合タルニ足^{イキツカ}遅息疲^レ遂^ニ只中^ニヲ大ノカフラシテヒヤウツハトイラレ
テ足ヲモ不^レシテ引^マ□^ヒヌレハ粟草一口ヲモ不^レ食清水一^ニ適^マヲモ
不^レ飲シテ其命亡^マ了^ル

かつて永井義憲氏によって紹介された^(註)金沢文庫蔵の「餓鹿因縁」と題する説草の一節。群れを離れた一匹の餓えた鹿が、三度まで狩人の矢を通れながら、最後に老練な武者に追いつめられて射殺される利那を描いたものだが、走り疲れた鹿が大の鎗矢で「ひやうづば」と射られる場面が、具体的にいかにもなまなましい。

この書そのものは、鎌倉末期の成立と推測されており、さして古いものではないが、唱導僧たちのたくみな話術を記録化したもの

のといわれるこれらの説草は、永井氏も指摘されているように、語りものとしての軍記とかかわりが深く、軍記の文体の形成について示唆するところが少くない。右の矢音の部分も、唱導僧の口語りのリズムをしのばせるところで、こうした擬声語の表現が語りの技巧の中で次第に洗練され、やがて定着化して行ったものと思われる。

注 永井義憲「金沢文庫蔵『餓鹿因縁』のこと」(『大妻国文』昭和46・3)

新刊紹介

小林保治校注

『古事談』上・下

新たに書陵部本を底本に、初めての訓読文および頭注を加えた画期的な校注である。これまでは昭和七年にでた国史大系本がもつともよく使われた本文だが訓読も頭注もない。

本書の最も有益な点は、従来なかった頭

注が詳細に付されていることにある。本文記事の歴史記録との照合、あるいは必要事項の通出、伝記の研究成果の投入、同類話の掲出と異同の指摘などがそれである。それらには漢籍におよび、歴史の研究水準を豊富にもり込み、神道作法・仏教行事の故事も検索されている。

古事談は貴族と武士の書承故事説話であるからこうした他の説話および事実との関係が問題となる。それらはこの度の注によ

って各話の研究水準が知られ、今後の指針となる。また初めての訓読は、口承と書承の文体比較からも興味深く、説話研究の重要な課題を提起している。本書は凡例によると多くの助力者により成るといふ。その総合成果ともいえる研究は今後、一つの方向を暗示する。巻末の出典一覧が有益。他に解説・文学史上の位置の論を収載。(昭和56・11 現代思潮社 A5判 上三三二頁 下三九三頁 各二四〇〇円)〔石原昭平〕